

# 北海道師範塾 塾頭通信

## 「教師の道」

第754号 平成26年6月17日

### 性格スキルの向上（2）

鶴教授は、人材育成を考える場合、着目すべきはスキル（技能）であるが、企業活動や技術の進歩という切り口でスキルを論じているのでは限界があると述べています。そして、この問題、つまり教育と労働の問題を統一的に考える上で、2000年にノーベル経済学賞を受賞した米シカゴ大学のジェームズ・ハックマン教授らを中心とした「非認知能力」の役割を強調した研究が有益であるとしています。

「認知能力」はペーパーテストで測れますが、「非認知能力」はテスト等では測る事が出来ません。

ハックマン教授は彼の研究の中で、米国で家庭環境に問題のある就学前の幼児に対して、「認知能力」よりも「非認知能力」を向上させる事で、その後の人生に大きなプラスの影響を与える事を強調しています。また、ハックマン教授は、「認知能力」を「認知スキル」、「非認知能力」を「性格スキル」と位置付けると共に、「性格スキル」というのは極めて個人的な形質に由来するものだけれども、この形質は学びを通して変化するものだとしています（1月20日付日本経済新聞から）。

「持って生まれた性格は変わらない」とは良くいわれる言葉ですが、「性格スキル」は学びを通して変化し得るものだというのは、大変重要な指摘だと思います。

#### ビックファイブ

この表は、ハックマン教授らの研究の成果で、「性格スキル」をよりきめ細かく定義したものです。ハックマン教授によれば、「性格スキル

	定 義	側 面
真面目さ	計画性、責任感、勤勉性の傾向	自己規律、粘り強さ、熟慮
開放性	新たな美的、文化的、知的な経験に開放的な傾向	好奇心、想像力、審美眼
外向性	自分の関心や精力が外の人や物に向けられる傾向	積極性、社交性、明るさ
協調性	利己的ではなく協調的に行動できる傾向	思いやり、やさしさ
精神的安定性	感情的反応の予測性と整合性の傾向	不安、いらいら、衝動が少ない

【日経新聞(1月20日付)から転載】

「性格スキル」、取り分け「真面目さ」は職業生活をはじめとする人生の結果に最も広範に影響を与えているとしています。

就職して3年以内に辞めてしまう若者には、例えばブラック企業に就職してしまったために辞めざるを得なくなったというようなケースもありますが、その多くは

ビックファイブに欠けているところがあるのではないかと思います。

採用する側の意識からすると、業種業態にかかわらず、頭が良くても性格が悪いのは困るし、初めから真面目さが感じられなければ採用する気は起きないでしょう。

このように、「性格スキル」が職業生活をはじめ人生のあらゆる面で大きな影響を与えるとすれば、そのスキルをどうすれば高める事が出来るのかは、重要な問題です。

この点についてヘックマン教授は、「すべてのスキルを形成する上で幼年期が重要だ」という確固たるエビデンス（科学的証拠）はあるものの、性格スキルは認知スキルに比べ後年でも伸びしろがあるので、青年時の矯正は性格スキルに集中すべきだ」と主張しています（1月20日付日本経済新聞から）。

ヘックマン教授が引き合いに出しているのは、かつての徒弟制度の下で、若者が大人と信頼関係を結びながら指導や助言を受け、その中で技術の他にも、仕事をさぼらない、他人とうまくやる、根気よく仕事に取り組む、といった貴重な「性格スキル」を身に付ける事が出来たとしています（1月20日付日本経済新聞から）。

こうした事は、現代の日本でも職人の世界では普通に見られる事ですが、職人の世界が技術だけではなく「性格スキル」をアップする上でも極めて有効なシステムだという事は、十分認識して置く必要があります。

鶴教授は、欧州では若年失業の問題が深刻だが、ドイツ、スイス、オーストリア等徒弟制度に起源を持つ職業実習が盛んな国の若年失業率は低く、2008年からの大不況でも、それ程若年失業率が上昇しなかったが、これも職業実習制度の持つ職場での「性格スキル」の形成と関係がありそうだと述べています（1月20日付日本経済新聞から）。そうだとすれば、若者達が社会で自立して生きていく上でも、学校におけるキャリア教育のみならず、あらゆる場面で「性格スキル」の向上に積極的に取り組むことが、重要かつ効果的だといえるのではないのでしょうか。

（塾頭：吉田 洋一）